

ドナウ通信

No. 50

目次

新年所感	特命全権大使	松本 和朗	2
新年のご挨拶	ハンガリー日本人会会長	吉岡 直道	5
タイタニック日本丸の処方箋	商工会幹事就任に当たって	菱木 勤治	6
商工部会活動振り返って	2001年度幹事	宮崎 元一郎	7
会社紹介 「KENWOOD」		室本 忠志	9
内務大臣からの返事			11
補習校より			13
-作文-			
とよだ げん/あら木 まさおみ/吉原 岬/神谷 理沙子			
山崎 勇祐/山名 杉太/荒木 優衣/村松 佳奈/近藤 麻実			
-俳句作品-			16
「テニス部ウィーン遠征記」			
～私の愛するブダペストのテニス狂達～		江田 昌宏	18
読書ノート			
『死の病原体-プリオン』	リチャード・ローズ著	盛田 常夫	22
ハンガリー出身・関連科学者一覧			24
編集室より・日本人会便り			36

新年所感

特命全権大使

松本和朗

あけましておめでとございませう。本年が、ハンガリーと日本との両国関係のさらなる飛躍の年になりますことを願っています。

ハンガリーで勤務して今実感していますことは、両国関係を支えている幾つかの積極的な要素があり、これからの両国関係はより成熟した新しい段階に入っていくのではないかとこの印象を私は持っています。

第一の要素は、当地における日系企業の活躍であります。着任当初、幾つかの日系企業の一〇周年行事に参加しました。ハンガリーの体制転換後の早い段階で当地に進出したこれら企業がその後の我が国からの投資の先導役となったといえますが、現在、約九〇社の日系企業が当国で

活躍し、ハンガリーに対する日本の直接投資は累計で一〇億ドルに達し、中東欧に対する日本の直接投資の五割を占めています。在留邦人も現在約八五〇人となり、増加傾向にあります。ブダペストの日本人補習校は現在生徒数六五名、来年はさらに生徒数が増える見込みです。そういう意味でハンガリーと日本との両国関係に力強い勢いがあることを感じます。

数多くの企業・経済協力関係者がハンガリーを訪問しておりますが、昨年五月には、渡里団長率いるミツシヨンの参加を得て、日本ハンガリー経済合同委員会が当地で開催されました。六月に行われたJETRO企画のブダペスト機械部品調達展示商談会も手応えを感じさせるものでした。九月には松下団長の率いる関係連ミツシヨンが当地を訪問し、ゲイツ前大統領のほか、マトルチ経済大臣、ポロシユ大臣等と懇談いたしました。

ました。

第二に、このように両国関係の基礎は経済にあり、ハンガリーにとっても、日本にとっても、お互い重要なビジネス・パートナーではありますが、両国の関係は経済だけにとどまらず、政治、文化等の面で様々な交流が活発に行われています。ハンガリー側では日本を戦略パートナーと位置づけている人がオルバン首相はじめ要人の中には少なくありません。

昨年五月友好議連副会長として訪問された衛藤前外務副大臣夫妻はコシヤ会長はじめハンガリー側友好議連のメンバーと懇談されました。また、八月九月にかけて烏海議員夫妻の訪問、石破、米田議員一行の国防関係者との協議、中山衆議院憲法調査会一行の訪問、さらには、ハンガリー外務省の招待による保岡議員夫妻の訪問など議員交流も活発に行われました。また、一〇月にはトマ

イ外務次官補が東京で、続いて一月には当地のサイバー犯罪条約署名式に出席した有馬政府代表がボロシユEU拡大担当大臣と二国間協議を行いました。

私が関与した文化行事をふりかえってみますと、最初の行事はリスト音楽院との共催による三上明子さんのフルート演奏会でした。続いて、六月、皇后陛下の絵本『はじめてのやまのぼり』のハンガリー語訳出版記念会を行いました。当日はマードル大統領夫人のほか、一昨年四月日本を公式訪問された前ゲンツ大統領夫妻や、ロツケンバウアー文化遺産大臣、シュデイ・ハンガリー前駐日大使夫妻にも出席いただき、成功裏に終えることができました。絵本の翻訳者であるゲルゲイ・ユリア先生の日本語授業の生徒さん二人がハンガリー語、日本語で絵本を朗読するほほえましい場面は今でも印象に残っております。このほか、大岡信先

生の講演や福島光加師範の草月流生け花デモンストレーション、所鳳弘先生の組み紐といった行事がこの月に集中しました。

七月には第一〇回国際剣道大会がブダペストで行われ、休暇先のデブレツチエンから閉会式に駆けつけました。九月はじめには日本ハンガリー外科学会が発足、記念セミナーには日本から北島慶応義塾大学教授、比企北里大学名誉教授はじめ日本から外科関係者が参加されました。さらに、NHK特集番組「王妃エリザベート」撮影のため、一路真輝さん一行の訪問があり、また、一〇月には大使館、国際交流基金、JAI CA / JOVC、日本航空共催で日本語のスピーチコンテストを行いました。私は初めて参加し、若い人達の熱気に圧倒されました。また、和久奈ちよさんのご主人ワグナー・ナンダールさんの彫刻作品「哲学の庭」が里帰りして、ゲレルトの丘で

除幕式が行われました。一一月の四ツ谷龍先生の俳句の講演も好評でしたし、国際交流基金の邦楽コンサートも東西の音楽の出会いをテーマに矢野司空先生はじめ出演者による意欲的な演奏が行われました。

地方行事でも、七月はじめヘレンド社の一七五周年記念式典に夫妻で招かれました。一〇月、ケチケメート市のコグーイ音楽研究所に対する文化無償引き渡し式があり、ペーケシュチャバ市等での日本祭、一一月のレチエクの日本文化祭にも参加しました。レチエクではヘヴェシュ県案内の日本語版をもらい、同県と山梨県との交流の足跡を確認できました。

文化行事は大使館の活動にとどまらず、地方自治体や民間団体、あるいは個々の企業や個人レベルでも様々な交流が行われています。夏にはブダペスト市と友好協力関係にある大阪市関助役一行が訪問、一〇月

には秋田県千葉副知事一行が訪問し、ハンガリー工科大学等との科学技術協力を推進し、また、一〇月にコーシャ会長の黒沢明映画週間などの企画もありました。一二月にはサンヨールが主なスポンサーとなつてヴィハール・ユデイトさんと学生たちが翻訳した日本の童話集「桃太郎」の出版記念会がサーライみどりさんも後援されて行われました。盛田常夫さんが日本語に翻訳された『異星人伝説』マルクス・ジョルジュ教授著の出版記念行事もありました。各方面で活発な文化交流が行われていることは喜ばしい限りです。

第三に、この国の人達は日本に親近感を持っています。勿論、二〇〇四年EU加盟を目指しているハンガリーの進む方向が、欧州に回帰することにあることはいうまでもありません。しかし、同時にこの国の人達は歴史や伝統を愛する人達でもあります。昨年は建国一〇〇〇年祭の行

事が数多く行われましたが、ハンガリーの人達は、一世紀にハンガリーの地に定住してキリスト教に帰依した自分たちの祖先が、その前は東方系の出身であることを忘れてはいません。私はいろんな人にお会いして、日本もハンガリーも同じ東方系だということをいろんな機会で見ました。この国の人達は、一般に外国の人達に優しいとの印象を持っています。日本人に対しても親切であると同時に、日本人は遠い親戚であるとの気持ちを持っています。私が前に勤務したギリシャの人達も日本に対して親近感をもっており、かつては小泉八雲（ラファテオ・ハーン）のようにギリシャで生まれ、日本に帰化した人もいます。しかし、ギリシャの人達は欧州文化発祥の地であることを自認しており、日本とは遠い親戚であるという感覚はなかったように思います。欧州回帰なり、欧州復帰を目指すハンガリーではあ

りますが、歴史を大切にし、自分たちの出身（ルーツ）を強く意識してこれからも生きていく人達ではないかと思っています。

両国の架け橋の役割を担う数多くの人達の努力で、二国間関係が順調に発展していますが、二〇〇二年が午年にちなんで両国関係の新たな力強い出発点となりますことを願っています。

新年のご挨拶

ハンガリー日本人会会長

吉岡 直道

ハンガリー日本人会の皆様 明けましておめでとございます。皆様方には 様々な思いで新年を迎えておられることと存じます。

期待に胸膨らませた新年！ あるいは今年こそはと心に記するものがある新年！ いずれにせよ 平穩無事に新年を迎えられたことお喜び申し上げます。

私にとりまして ハンガリー日本人会の会長をさせて戴くのはこれで二度目で 丁度十年振りになります。ハンガリーの社会は この十年の間に 大変な変化を遂げました。法律や制度の運用における社会主義的、官僚主義な対応やものの考え方は余り変わっていないように見えますが、社会の枠組、経済社会における価値

観は百八 度変わりました。

個々人にとつて 簡単にはついで行けないほどの急激な変化だったのではと思えるのですが 社会が荒廃しないで新しい社会作りができたのは ハンガリーが求める方向性がはつきりしていたこととハンガリー人の民度の高さのお陰であろうと考えます。しかし、他方 変えてはいけない人間的なものを タフに守つて来たからかもしれません。

実際にはその目的の一つである「E.C.加盟」が「夢」から「現実」になろうとしております。一 年前には E.C.加盟など「夢の又夢」であつたと思えます。本当に 大変な変化で 良く成し遂げたと思えます。ハンガリー日本人会も 二 一年の総会(二月九日開催)の場でご紹介しましたが、枠組を変えようとしております。ハンガリーの法律に基づいた「法人化」です。正直申上げて「法人化」することによりそ

れだけで資金的負担や業務が増えてしまいます。しかしながら、ハンガリー社会が開かれた国際社会になりしかも E.C.加盟国になろうとしている時に 日本人会も私的な組織からの脱却が必要と考えたからです。

又「日本人相互の懇親」に留まらず「ハンガリー社会の中で共生していく」為には、私的な組織より「Official な組織」にすることが最下限必要と考えたからです。許可は昨年末やっと取得しました。これから枠組の肉付け作業が始まります。ただし 枠組創り以上に大変なのは中味を整えることです。これには日本人会の皆様のご参加が必要不可欠です。理事並びに幹事だけの運営には限度があります。日本人会の Program 作り並びにその実行に関し、なにとぞ積極的にご参加して戴きたく存じます。日常活動に関するアイデアの提供・ご助言も是非お願い致します。

タイタニック

日本丸の処方箋

商工会幹事就任に当たって

ジェットロブダペスト

菱木勤治

二〇〇二年度の商工会幹事を一年間お引き受けることになった。副幹事として協和発酵の石崎さん、ユークエクセデイーの横山さんが就任されたので、私と三人で商工会の運営を担当する。メンバー企業の皆様のご協力をえて、スムーズな運営をしていきたい。商工会の幹事としての特別な抱負といったものはないので、以下では普段私が考えていることの一端を紹介したい。

日本発世界同時不況の足音

最近日本の経済停滞・不況が、世界同時不況を引き起こすのではないかとまでいわれている。私もありう

るかも知れないと思う。たとえば、日本は氷山に衝突する寸前のタイタニック号だ。それにしても小泉改革でまだ高速道路を作りたい勢力が抵抗している様は、乗船客として「不敵な奴」と誉めるべきか、「命知らず」と感心すべきか、言葉もでない。

日本がタイタニック号になろうとしている状況を客観的に示す指標がある。それは各国の競争力ランクだ。IMD（スイスのビジネス・スクールの）のランクでは日本が二六位（一〇年前は一位）、ハンガリーは二七位である。この結果をみて私は不思議だとは思わず、当然だと思う。この結果は、日本が国全体で競争力を高めるような政策をとってこなかったことを反映しているし、今の緩慢な改革スピードではランクはもつと下がり、やがてハンガリーにも抜かれるであろう。正確に言えば、政策は実施されたのだが、不十分なし不

適切なものだった。

九〇年代初、国・地方をあげてベンチャービジネス振興が合言葉となり、種々の施策が導入された。だが、今もってこの分野は米国の足元にも及ばない。なぜなら、ベンチャーで欠かせないリスクがあっても独立し、自分のやりたいことをやるという人が極端に少なく、各種規制が新規参入を邪魔しているからだ。これを直すには、迂遠ではあっても教育改革から始めて、創造性・積極性に富み、自主・独立型の人材を育成しなければならぬ。だが、今だに他人と同じ思考・行動を重んじ、自己主張をしない「金太郎飴」人間を作りつづけているし、有名大学信仰がなくならない。これではいつまでたっても、企業家を目指す人は増えない。

小泉改革が山場を迎えているが、よく指摘されるように改革をしたあとのような国をめざすのか、全く明らかにされていない。教育、税制、年金、福祉・医療など多くの分野で抜本改革が必要とされているのに、必ずしも将来的に通用する政策は明らかにされず、当座の解決策が議論されているだけだ。当面の議論で必要なことは、多くの分野で小沢一郎氏ではないが「普通の国」になることを目指し、そのための政策を実践すべきだ。欧米でごく当たり前のことが日本では当たり前でないことが多いことだ。

教育でいえば、先進国では小中学校の学級の人数は二二人が平均だから、来年からでも四〇人学級をやめ二〇人にすればいいし、レベルの低い学生を大量に卒業させるシステムを改め、落第制度（欧米では二割は落第）を厳しく適用すべきであろう。このような地に足のついた抜本

改革ができないと、中国の追い上げなどで日本の地盤沈下はますますひどくなると思われる。政治家だけでなく、すべての国民がこのような危機意識を共有し、改革を迫っていくべきだと思う。

商工部会活動振り返って

二〇〇一年度幹事

宮崎 元一郎

「宮崎さん、今年の二〇〇一年度の商工部会幹事になりました。おめでとうございます」前幹事の竹中工務店の伊藤さんに電話でそう伝えられ一瞬頭の中が白くなったことを今のこのように覚えている。商工部会の会員でありながら二〇〇〇年度の出席率は五〇％以下。そんな会員に果たして幹事が勤まるのだろうかと言う不安がまず全身を襲った。

毎月の本社への出張。どうしても例会が執り行われる第二火曜日と重なることが多く、最初のうちはずつとこの一年助けて頂いた副幹事の伊藤忠商事の田路さんやマジヤールズスキの近藤さんに進行役をお願いするしかない月が続いた。例会に出席

されていた会員の皆さんはいつ宮崎が例会に出てくるかと、さぞかしやきもきしながらじっと見守ってくれていたと思う。

最初から悩み続киだったのは議題づくり。今から思えば議題なくとも、一ヶ月に一度、二時間と言う時間をフルにその場で何について話し合っていくか、全員で考え議論しても良かったのだが、当然そんなこと思いつくはずもなく、例会間際まで議題が決まらず困ったときも少なくはなかった。しかしどういっわけか、運がいいのか悪運が強いと言うのか土壇場になって会員の皆様より議題の提案があり助けて頂いたり、JETROの菱木さんやJICAの高嶋さんに議題をお願いをし協力して頂き、まさに綱渡りと言った状態で（自分の人生のごとく！？）難局を切り抜けてこれたと自分で感心する。と同時に結果的に毎回三〇名以上の会員の方に出席して頂け（出席率九

〇%以上）定時を過ぎてしまうこともしばしばあった程 盛り上げて頂けたことが何より嬉しく、感謝するばかりである。

議題の中身は種々様々であった。日本のテレビ朝日系でも放映されていた吉本興業企画による当地のサーカスフェスティバルの案内 第一勧業銀行、三菱銀行等による為替講演 ハンガリーにおける会計関連の特有の例に対する意見・情報交換 昨今の治安に対する問題提起及び情報交換。この問題はかなりの物議をかもし出し、いつになく会員全員からリスク管理という観点から率先して意見交換がされていたことは言うまでもない。また一二月の例会では年末に実施された総会の運営の見直しが取り上げられ全員で良くしていこうと言う姿勢が前向きに表れていたと思う。

こうして振り返るとこの一年例会における意見交換や情報交換とい

うものがかなり率先して出されたように思う。もちろん自分の反省としては 更にその部分を掘り下げ形式にとらわれない形で意見交換が出来る場作りができたら良かったと思う。また一方では何が、どういう形が本来の商工部会のあり方なのか、そしてどこに例会の意義を見出しているか考える場もあって良かったのではと言う反省もある。現在四〇社が商工部会に参画している中そういうことも話あってもいい時期なのかもしれない。

私事ではあるが、来年よりこのハンガリーを離れことになり大変心残りではあるが益々のハンガリー日本人会、商工部会の発展を今後お祈りしたい。

会社紹介

KENWOOD ELECTRONICS
BRETAGNE S.A. Hungarian
Branch

室本 忠志

皆さんは、KENWOOD（ケンウッド）と聞いて何を想像されますか。恐らく、イギリスのキッチンメーカーを思い浮かべる方もいらっしゃるかと思いますので、KENWOODという会社について少し紹介いたします。

皆さんは、「TRIO（トリオ）」という名前をご存知ですか。若い方はご存知ないかもしれませんが、一九六〇年～一九七九年まではオーディオのトリオといわれた時代がありました。一九八〇年にカーオーディオ分

野に進出しブランド名も「TRIOからKENWOODに改めました。一九八六年に社名を「株式会社ケンウッド」に変更し、その後、

カーナビゲーションシステムの販売

デジタル携帯電話（PDC）端末市場に参入

PHS（パーソナルハンディホン）端末を発売

カーオーディオ用欧州DABレシーバーを発売

DVDナビゲーション発売

と様々な製品群を世に出してきました。

二〇〇一年、IT（情報技術）の進展は、かつて人類が経験したことのないスピードで私たちの生活に変化と可能性をもたらしています。それを支えるエレクトロニクス産業は、豊かで、希望に満ちた新時代を牽引する役割を担っているといえます。こうしたなかケンウッドは、創業以

来培ってきた「音」と「通信」の独自技術と、先進的なデジタル技術をもとに、ネットワーク社会に貢献する「ケンウッドらしいアイデンティティ」を備えた製品の開発に取り組んでおります。

多少なりともケンウッドが、どんな会社かお分かり頂けたでしょうか。それでは、わが社 KENWOOD ELECTRONICS BRETAGNE S.A. Hungarian Branch について紹介いたします。

事務所はブタペストから西南六〇 Km Szekesfehervar にある VIDEOTON Holding Rt の敷地内にあります。

住所 8000 Szekesfehervar,

Berenyi ut 72-100,
Hungary

設立 一九九八年九月

従業員 一七人（日本人六名）

生産品目 カーオーディオ

ハンガリーとの関わりは、一九九

六年三月に VIDEOTON Holding Rt.へカーオーディオ生産を委託したことに始まります。以前は、

KENWOOD ELECTRONICS BRETAGNE S.A.(フランスのレンヌ工場)で生産しておりましたが、一九九八年九月に欧州における消費地生産を拡大する目的で、

Szekesfehervar に KENWOOD ELECTRONICS BRETAGNE S.A.の支店として事務所を設立し、日本人を配置して外注工場管理のオペレーションを開始し、現在に至っております。

欧州におけるカーオーディオ生産拠点としての役割を担っており、年間一〇〇万台に及ぶ製品を生産しております。主にカセットレシーバー、CDレシーバー、CDチェンジャーなどです。最近では、ブタペストにある大手スーパーやカーショップなどでケンウッド製品をお手にとって

見ることができると思っています。

ケンウッドは、一九八〇年に家庭用オーディオ機器の本格的なサウンドテクノロジーを満載したカーオーディオでデビューして以来、カーオーディオのトップブランドとして礎を築き続け、今日に至るまで、数々の先進テクノロジーを搭載した魅力あふれる製品群を世に送り出し続けております。

MDやDVDといったデジタルメディアの普及やデジタル放送など、クルマを取り巻くネットワークの発展は、カーオーディオやカーナビゲーションの分野に大きな進歩をもたらしています。ケンウッドは、来るべく時代に向け、最新の技術開発成果をいち早く導入し、新たなメディアの可能性を最大限に発揮する商品を提供してまいります。

どうか、今後のケンウッド製品にご期待頂くと共に Hungarian Branchとも末長くお付き合い頂け

ます事をお願い申し上げます。

内務大臣からの返書

謹啓 商工会会長殿

二〇〇一年一月二日付け、ピ
ンテル・シャンドール内務大臣に宛
てられたお手紙にたいし、大臣から
の委任により、私がお答えします。

ハンガリー共和国政府はわが国に
生活ないし滞在する外国人の安全に
かんし、とくに配慮を図っておりま
す。先般も、内務省行政事務次官の
フェルカイ・ラーズロー氏は、これ
にかんする二年計画を策定されたば
かりであります。これはハンガリー
に滞在する外国人への危害を未然に
防いだり、抑制したり、あるいは被
害にあつた旅行者の救済を目指すも
のであります。この計画は多くの組
織と機関に、それぞれの課題を課し
ております。

ご提案のなかに、外国人専用の二
四時間緊急連絡回線の設置を挙げら

れています。このご提案はわれわれ
にとつて新規のものではなく、すで
に多くの部署でこの必要性について
議論しております。この緊急連絡回
線設置が完成するまでの間、全国警
察本部でおこなっている犯罪の未然
防御にかんする助言や提案を次のサ
イトでご覧になることをお勧めいた
します（www.rendorseg.hu、
www.ork.hu、www.police.hu）。

さらに、今年より、警察の
TELEFONTANU（電話通報）プログラ
ムが始まっていることをお知らせし
たいと思います。このプログラムの
ポイントは、06-80-555-111の電
話番号で、あらゆる問題を無料で通
報できるところにあります。受領さ
れた通報は担当部署に渡され、適切
な措置が講じられることになってい
ます。

犯罪未然阻止の部署には、外人へ
の犯罪防止の専門課があります。こ
の問題にかんして、19/2001号の対

策として、二〇〇一年の観光警察へ
の特別課題を設定しております。

お手紙のなかには、外人が犯罪に
ある可能性の高い高速道路やガソリ
ンスタンドでの警ら増強の必要性を
強調されております。これにかんし
ては、23/2001号の措置により、高
速道路や外人が頻繁に通行する区間
の巡回を増強するように取り決めて
おります。

さらに、警察が主要なホテルやガ
ソリンスタンドと提携し、一般的に
協力の確立や緊急連絡電話の設置を
ご提案されております。これらの場所
には通常電話回線がありますので、
これを使って一〇七番あるいは一一
二番でハンガリー警察を呼び出し、
緊急の場合に警察の支援を得ること
ができます。

お手紙にありました東駅における
日本人被害について調査したところ、
今年、これまで三件の日本人被害が
記録されていきました。貴殿が指摘さ

れました具体的事例について、どの事例であるか特定することはできませんでしたが、三件とも書類を調査しました。そこからは、係官の取り調べで法的な違反や規則違反があったと認定することはできません。事情聴取に遅滞があつたとすれば、その原因は法律に規定されている通訳の同席ということにあつたと考えられ、これで聴取の開始が遅れたものと判断します。

ブダペスト、

二〇〇一年一月一六日

謹白

オルバン・ピーテル警察本部次長

解説：本返書は、「ドナウ通信」前号

に掲載した商工会幹事からピンテル内務大臣宛ての要請書にたいする回答である。予想されたとはいえ、政府官僚による回答は、積極的な対応を約束したものではありません。事の重要性に鑑み、新たな対応を積極的にとっていくという前向きな文言はありません。

以前、フェリヘジ空港内の税関による外貨所持検査にかんして、同様な要請書を大蔵省、内務省、首相府に送り、かつ空港内の旅券審査ボックスの廃止を提案したことがあります。この時も、大臣に代わり、担当の政府部署の長から回答があり、建前を並べるだけのものでした。他方、内務省からは別途、旅券審査体制についての意見を聴取したいという連絡があり、ボックスが旧ソ連時代の遺物であり、ロシアでさえすでにオープン・カウンター方式に変更し

ており、この面ではハンガリーが一番遅れているという認識を披露したことがあります。当時は、お金がないので、既存施設の取り壊しと新設は難しいということでした。

その後、フェリヘジ2Bが開港した折、Aも含めて、旅券審査ボックスが廃止され、オープンデスク方式に変わりました。この変更により、われわれの提案がどれほどの効果を果たしたか分かりませんが、不合理にたいして多くの声寄せられていくことで、行政当局を動かすことが実証されたと考えます。

一つの要請で、多くのことが変わることは期待できません。しかし、繰り返し要請することで、そのような声を行政に反映することは可能です。その意味で、問題が生じた時に、時を逸せず適切な対応をおこなうことが重要だと考えます。

補習校より

作文

はじめてのぶんかさい

小学部 一ねん とよだ げん

ぼくは、もぐらたたきがおもしろかったです。なぜかというと、一かじめもやったことがなかったからです。はじめてやったからむずかしかったけれど、おもしろかったです。そしてぼくは、ホットケーキをたべたかったけど、いっぱい人がならんでいてたべられなかったのがざんねんでした。

らいねんは、ぼくもおみやさんがやりたいです。できればテレビゲームやさんがやりたいです。

文かさい

小学部 二年 あら木 まさおみ

文かさいで、くまの子ウーフをやりました。自分でも、うまい、と思いました。ぼくは、くまの子ウーフのお父さんでした。

そのつぎ、どうぶつたたきをしました。

五年生たちは、すごいおいしかったやきを作っていました。

今日は、すごい、いい日でした。

がんばってやったホットケーキ

小学部 三年 吉原 岬

「がんばってやろう」と私は、頭の中で思いました。そして、ふと、前を見るとお客さんがたくさんいました。はじめから、お客さんがたくさんいたのでちょっときんちようしました。きつさてんの名前は、「きつさ

3」です。ホットケーキは、「ジュー

と音をたてて、おいしそうです。何回も来て何回も食べているお客さんもいました。そして、一時になってから自分で食べる時間がきたと思うと、また、お客さんがきたりして、たいへんでした。やつのことでホットケーキを食べました。がんばってやいた後に食べたホットケーキは、最高においしかったです。また、来年もがんばりたいです。

あつくておいしかった

ホットケーキ

小学部 三年 神谷 理沙子

「ジュージュー」ホットケーキがやけた。みんな一しよけんめいにホットケーキを作った。お客さんもたくさんきてくれた。とてもうれしかった。だけど、私たちはあまり食べられなかった。私たちが、がんばってやいたホットケーキをみんなが

食べてくれたのでよかった。五年生のたこやきもおいしかった。文化祭はとても楽しかった。文化祭が終わった後、お母さんが、ホットケーキ、ひっくり返すのがじょうずだったね」といってニッコリしてくれた。私は、その時「文化祭っていいな」と思いました。来年もまたホットケーキを作りたいです。

初めての文化祭

小学部 四年 山崎 勇祐

ぼくは、文化祭で、よく働いた。じゅんぴの時は、あんまり働かなかったけど、本番は、ちゃんと働いた。げきでは、当日、次が自分たちの番というときになって、いそいでしっぽをつけた。ぼくが、泣いている声で言ったのが、よくうけていた。一番おもしろかったのは、一番最後の中学生のだった。げきが終わると、くつろぎキツサ

のおにぎり作りにおおいそがし。始まると、いきなりたくさんお客が入ってきて、さらにおおいそがし。もう大こんらん。思ったより、うまくいかないと思った。お客さんが少なくなると、その間におにぎりを作っていた。マツサージでは、杉太がいないときにお客さんが「スーパ強い」をたのんだ時は、代わりに大かぼくがやらないといけなかった。ぼくは、おなががすいてきたので、ちよつと食べに行った。ホットケーキ屋に行つて、食べ、クレープ屋、たこやき屋にも行った。今回は初めてだったけれど、ほとんど働いていた。けつこう働いているのも楽しかった。

文化祭

小学部 四年 山名 杉太

文化祭がありました。たこやきが一番うまかったです。

ゲームきつさにはエアホットケーキがありました。飲み物もありました。クレープ屋には行っていません。もぐらたたきでは二万点を取りました。

ぼくたちは、きつさをやりました。きつさではにぎり飯を作りました。「うまい」と、ぼくは言いました。

きつさスライでは、フルーツポンチを食べました。あと、コーラも飲みました。

げきでは、ハンバーガーシヨップでゆうくんが「ない！」と言ったのと、しょうたるくんがさいふを投げつけたのがおもしろかったです。一年生のおはかも最高でした。

ばんぷきんたるうはあまりはまりませんでした。

今年のはイマイチだったので来年をきたいしています。

じごくのじゅうみん

小学部 五年 荒木 優衣

この前、わたしは、はじめて文化祭をしました。

げきをやるときに、すごいときどきしました。なぜかという本当は、その日、朝からげきの練習をしようと思っていたのに、五年生の全員が集まらなかつたので練習ができなかつたからです。わたしは、他の人のげきを見るたびに『うまいなー。五年生のげきもだいじょうぶかなー？』と、考えているうちに、五年生のげき、じごくのあばれんぼうの順番が来ました。わたしは、観客の人たちを野菜にたとえていました。最初は、すごいときどきしていました。でも、だんだんときどきしなくなってしまうには、じごくの住民のようになれてしまいました。それで、もしわたしが死んだとしても、もう

じごくにはなれたから、じごくに行ってもだいじょうぶだなあと思いました。そして、みんなうまく終わりました。楽しかったです。

そのあと、たこやきをやりました。男子のたこやきは、シュークリームの皮の味がしました。でも、楽しかったです。

今度の文化祭も楽しみに待っています。と思います。

文化祭

小学部 六年 村松 佳奈

十一月十七日。私にとって初めての文化祭だった。舞台の方はともかく、クレープ屋は、ずっと前から楽しみにしていたので、舞台のクイズが終わった後、さっそくはりきって準備を始めた。

準備のための時間はすぐに切れてしまい、まだしっかり準備できていないところもあるのにお客さんはド

ンドンやって来る。だから、みんな遊ぶひまもなくすごく良く働いた。

でも、そのおかげでクレープはほとんど減っていったし、食べてくれた人はみんな、「おいしいかった」といつてくれたので、今までのつかれていても、「ああ、よかったな」と思える。

初めての文化祭は、色々大変だったしつかれたけど、すごくいい思い出になった。

ドタバタ文化祭

中学部 一年 近藤 麻実

今年の文化祭は、私は、小六の女子と一緒にやりました。クレープは、五十枚ほど、前の日に作っておき、あとのもうちよつとを文化祭当日に作りました。金曜日にクレープを作っていたとき、卵が足りなくなったり、牛にゆうがなくなってしまうので、今年はいても、ドタバタで

大変な文化祭でした。でも、みんな
 で力をあわせて、クレープを作ると
 いう事は、とても楽しくできました。
 ところが、最初のころは、まったく
 うまくクレープが焼けなくて、こげ
 たり、ひっくり返すときに、クレー
 プがビリビリになってしまつて、ど
 うなる事かと思ひました。でも、や
 っているうちに、ちよつとづつ、コ
 ツをつかんできました。
 文化祭当日に、店をあけると、み
 んなクレープをおいしいおいしいと
 言つて食べてくれました。前の日に、
 「もうちよつと甘いといいね。」
 と、言つていた先生も、食べてから、
 「やっぱりトッピングがあると、全
 然味がちがうね。」
 と、言つてくれて、とても嬉しかつ
 たです。
 今年の文化祭はとても大変だつた
 し、先生にも迷惑をかけてしまつた
 けれど、とても楽しいよい思い出を
 作れました。

俳句作品

夏休み	気楽にすごす	人々が	赤・黄色	落ち葉の思い出	家族旅
小四 塘	健介		行	小五 清水	郁馬
ヤクルトは	今年の秋に	優勝だ	たこやきを	おなかいっぱい	秋祭
小四 山名	杉太		り	小五 コズマ	ロバート
みくみん	木で休んでる	セミの	すずむしや	どうしてすずの	音で
小四 山崎	勇祐		なく	小五 荒木	優衣
声			とげとげと	かくとうしながら	く
秋の森	紅葉の色が	赤くなる	り拾い	小五 上坂	桃
小四 横山	ゆか		マツタケを	食べて食べては	いい
遊ぼうよ	早くふいてよ	春風よ	気分	小五 上原	康士朗
小四 太田	祥子		まつたけの	おいがぼくの	腹な
たいへんだ	かみなりくるよ	夏の	らす	小五 小山	健治
前	小四 岩谷	麻里	落ち葉たち	さよならつげた	お母
小四 児島	大		さん	小五 古川	友梨
たえられない	あまりにあつい	夏の	夕焼けが	走ってぼくを	追いか
小四 児島	大		る	小五 吉原	翼

落ちて行く	もみじがいやす	ぼく	秋深し	木の葉の色も	かわりつつ	木の葉がね	山の中でね	紅葉中
の心	小五 小野田	陽	中一 神谷	智明		中一 室本	一樹	
雪とけて	小川がサラサラ	歌い出	秋の夜	一瞬顔出す	流れ星	蟋蟀が	茸のしたで	雨宿り
す	小六 村松	佳奈	中一 近藤	麻実		中一 横山	知沙	
陽の光	海で子供が	とびはねる	秋の山	大空にくる	流れ星	テスト中	頭の中は	サンマ焼き
小六 ヴェセリ	マルタ		中一 塘	将太郎		中二 上原	綾香	
冬の夜	真白なつるが	まいおりの	流れ星	何でこんなに	明るいのに	ブダベスト	機能も凍る	寒さかな
小六 堀部	晃平		中一 手島	慎平		中二 木村	祐太郎	
雪がとけ	もえる命が	めばえ出る	今日こそは	絶対つかむ	流れ星	冬ぐもり	カラス去る時	雪になり
小六 大河内	薫子		中一 秦	弘典		中二 本	貴之	
秋雨に	かさで遊ぶ	子供たち	夏の夜	ホタルがまるで	星のよう	寒い朝	霧にとけゆく	白い息
小六 佐藤	美南		中一 古川	裕也		中三 賀澤	美樹	
春一番	青い空から	雲がさる	キラキラと	夜空に火の花	美しや	次の日に	動けなくなる	運動会
小六 ヴェセリ	ノーリ		中一 岩谷	篤		中三 佐分利	翔	
流れ星	流星群が	雨の様	霧の中	道に迷うと	大変だ	落ちゆく葉	別れ告げるか	この秋
中一 小野田	優		中一 太田	寛朗		中三 バログ	ナターリア	

テニス部ウィーン遠征記

私の愛するブダペストの

テニス狂達

江田 昌宏

私の二四年間のテニス生活において、これほどテニスが楽しく思える日々はありませんでした。私にとつて、試合とは常に勝たなくてはならないという重圧との戦いであり、練習は試合に勝つための試練でしかなく、チームと言えども、対抗戦のオーダーが決まるまでは敵同士でした。そんなテニスに対する考え方を、大きく変えて、心からプレーすること自体を楽しませてくれたのは、ブダペストのテニス狂達です。

プレー中は、勿論真剣ですが、時には馬鹿口を叩きあいながら、時には褒め称え、お互いに社会人としてまたテニスプレーヤーとして尊敬の

念を抱きながらのプレーは強い仲間意識を生み出し、もう何十年も一緒にいるような気分になさせてくれます。そんなテニス部が一泊二日で企画したウィーン日本人テニス部との第二回遠征試合が楽しくないはずがありません。

第一回目は二年程前、伝説のテニス狂FフィルムB監督率いる、男性六名、女性五名、子供三名の合計十四名によるウィーンへの殴り込み。試合前日のホイリゲであまりにはしやぎすぎ、ほぼ全員が二日酔いでの本試合では、勝てるはずもなく玉砕。今回は“黄金の酔っ払い”との異名を持つ、現テニス部最高のテニス狂M物産 H監督率いる男性一〇名、女性六名、乳児二名という大部隊で、バスを仕立ててのウィーン入り。

出発前から抜かりなく、通称ブダペストテニス界の“悪童”Eさんが力作、遠征ならぬ“遠足のしおり”なるものを作成、テニスをされない

奥様方のショッピングタイムを盛り込んだスケジュールや、遠足の注意事項で、“節度ある飲食や行動”を呼びかけ、およそ普段の言動とは異なる気配りと細やかさは、さすがにT工務店で営業・総務ご担当と参加者をうならせました。

とは言うものの、午前八時半にバスが走り出した途端、勇んでビールを配り始めたあたりはやはり悪童。ウィーンに着く頃にはほろ酔い加減になっている皆さんを横目に、ビールを差し出しても決して口にしないのはH監督。普段なら真っ先に飲み出し、真っ先に酔っ払っている監督の並々ならぬ決意を感じつつも、やはりこのメンバーで飲む酒はうまい。

“黄金の酔っ払い”、“監督”、“悪童”等、テニス部では誰ともなく、ニックネームをつけることが流行っております。例えば、午後五時の練習までの自由時間にテニスウエアでウィーンの町を奥様と闊歩するK発

酔いさんについたあだ名は“体育の先生”。テニスの中でも第一ボタンをはめ、いつも身だしなみを整えておられるＴ工業のＫさんは教頭先生”（まるで本当に小学生の遠足です）。そして夜のホイリゲで六年間のウイーンご駐在で培われた流暢なドイツ語を駆使し、仕切って頂いたＳ商事Ｆさんは“ホイリゲ奉行”。前回の遠征では一四名もいながら誰もドイツ語を話さず、メンバーの一人が店内を、店員を連れて歩き回り、あれこれと指差しながらオーダーした苦勞を考えると大助かりでした。そのホイリゲでは前回の教訓もあり、各自おいしいワインを控えようと試みながらも、やはりこのテニス部。馬鹿話が盛り上がるにつれ、ついワインを口に持つていく回数が増えます。後にして思えば、この酔っ払い集団の最大のミスは、勢いでＨ監督夫妻のミックスタブルスペアを結成してしまったこと。五時からの練習

で悪童の弟 次郎（工夫人。正真正銘の夫婦なのですが、なぜかいつのころからかこの夫婦は兄弟と呼ばれている）の必殺技“ジジ殺しシヨット”が炸裂し、肉離れで明日のミックスタブルスの出場が危ぶまれる教頭先生の代打として、Ｈ監督夫妻によるミックスへの出場を決めてしまったのです。顔は笑っていても、冷ややかに、自制を促す目で酔っ払い集団を見つめていた監督も責任感からかこのペア結成を了解したものの、後で物議を醸し出そうとは思ってもよらなかったことでしょう。その後、男性陣はホテルのバーで酔いを醒ましながらのテニス談義。“テニス用語を日本語で言ったら”という話で大いに盛り上がりました（例えばサーバーを奉仕者！くらいでないけどおもしろい）。一方女性陣は部屋に戻つてのブリッジ大会。男性陣よりも遅く一二時を過ぎてからの朝帰りには、普段は良妻賢母の奥様

方も大いに楽しまれたのではないでしょうが。翌日の試合は八ゲームという普段よりも長丁場。男子ダブルス三試合、女子ダブルス二試合、ミックスタブルス四試合の合計九試合。皆さん前日の酔っ払い集団とは思えない真剣な顔です。ミックスNO.4は“フィギュアスケーター”Ｓ商事工さんとＴ工務店Ｙ夫人。本当は学生時代、スピードスケーターだったのですが、そこは我テニス部のこと、意図的に勘違いをして、タイツをまとつたフィギュアスケーターに。おまけに得意曲は“くるみ割り人形”と決め付ける始末。前回に引き続き二回目の今回は、乳児を連れての参加の子連れ狼Ｙ夫人が健闘するも、やはり氷とコートは違ふのか、我フィギュアスケーターもコート上では得意の三回転ジャンプを決めることもできず敗退。

ミックスダブルスのNO.3は、体育会出身、T工業でもテニス部を立ち上げた筋金入りのテニスプレーヤー。教頭先生にかわり、前日ホイリゲで酔いに任せて決まった監督夫妻ペア。最近めきめきと上達されたこのご夫妻には一勝が大いに期待されます。が、しかし、オープンングの緊張からか、監督としての責任感からくる重圧のせい、はたまたご夫婦で組んでいるという他人には見えない何かによるものか、監督のプレーが一向に冴えません。ミックスダブルスでは男性が女性をカバーしなくては成り立たないのですが、良妻賢母の奥様は期待を裏切らない懸命なプレーをされているものの、監督は“動かない”、“捕らない”、“声をかけない”のないないづくし。普段の成長著しいプレーとはかけ離れており、これではいくら奥様ががんばっても勝てるわけがありません。結果は惨敗。

ミックスNO.2はホイリゲ奉行と再びY夫人。ホイリゲ奉行は、B P テニス部年長組とは思えないほどの豊富な運動量とねばり、そしてホイリゲマジックと呼ばれる独特の球筋が特徴で、ミックスのエキスパートとして期待されての出場。しかしながら相手の女性がかなりの強者。善戦するも惜しくも敗退。

NO.1は体育の先生と次郎さん（I夫人）。週末三回テニスをされており、笑顔が素敵と女性陣に大人気のテニス狂、体育の先生は大きな体から繰り出す、コントロールの良いビッグサーブと球が離れるまでどこに来るか相手に読ませない巧妙で切れのあるストロークが持ち味。一方“ジジ殺し”を有する次郎さんは男性チームにも混ざって練習している（この為、弟と呼ばれている説もある）女性離れした技術の持ち主。このペアはほとんど男子ダブルスペアであり、相手は男子・女子NO.1

でありながらもこれを粉碎し、B P チームへの初勝利をもたらしました。女子ダブルスNO.2ペアは良妻賢母の監督夫人と次郎さん。

そしてNO.1ペアはY夫人と次郎さん。両ペアとも全力を出し切り、後一息という場面もありましたが、何せ相手が悪い。相手ペアはかなり試合慣れしており、普段も男子に混ざって練習しているという強豪でした。両試合とも惜敗でしたが、今後につながる試合だったと思います。

男子ダブルスNO.3は監督とタカシーズ山さん（S商事Yさん）。実にB P テニス部には三名の“タカシさんがおられ、以前その内の二名がペアを組まれた際に“タカシーズ”という売れない漫才コンビのようなペア名をつけたことからこの名前がつかまりました。タカシーズ山さんはその体型通りの重いサーブと、体型からは想像もつかない機敏な動きが持ち味。監督もオープンングのミック

スとは打って変わり、普段の冴えを取り戻し快勝。先程のミックスは一体何だったのでしょうか。

男子ダブルスNO.2は親バカを通り越して、BPテニス部では馬鹿親一号と呼ばれているS社Yさん（ちなみに馬鹿親二号は筆者）と悪童の体育会爆発ペア。爆発的なフォアハンドとすぐれたテニスセンスを持つ馬鹿親一号と、爆発的なサーブと堅実で破壊力のあるストロークを持つ悪童ペアは、やはりその実力に違わず快勝。

NO.1はタカシーズ土さん（C社Tさん）と九月に愛娘が産まれた筆者馬鹿親二号。タカシーズ土さんはどのショットをとっても超一流のテニス狂。そして松岡修三ばりの熱血漢。この男子ダブルス三ペアは甲乙付けがたく、どのペアがNO.1に出てもおかしくないのですが（事実、前日練習では三つ巴で全ペア一勝一敗）、今回は人格者のタカシーズ

土さんと幹事であった小生に配慮して頂いてのNO.1出場。緊迫したゲームとなりましたが、熱い土さんに支えられ、接戦を制しての勝利。

以上のように、総合結果では四五と惜しくも負けはしたものの、男子ダブルスを三試合全勝したことでウィーンチームキャプテンも悔しがっており、一矢報いたと思います。

試合が終わってからはウィーンチームとの懇親会。帰りがバスという強みがある我がチームメンバーは次々とビールの大ジョッキを空け、いつもの酔っ払い集団と化すの間はかかりませんでした。そこで出たのが、オープニングという大切な試合で、ないないづくしの試合をした監督の解任動議。勿論言い出したのは悪童です。悪童に乗じて、他のメンバーも堰をきったように一勝差の敗因として監督のミックスを挙げ、“あれなら昨日アルコールをセーブしなくても同じ”発言まで飛び出し、

監督を肴にしてまたまたビールが進む。ブダペストに戻ってからもすっかり“監督”から“解任された監督”に名前が変わってしまい、しばらくメールでいじめの対象とされた“解任された監督”。もともと監督も負けではおらず、女性相手に強いボールが打てない、“フェミニスト監督”と言い張っておりましたが。

このように会社間の垣根を超え、世代を超え、勝手気ままなことが言い合えるのが我々テニス部。そして私の愛するテニス狂達です。日本語を話さない日もあり、単調になりがちな生活に大いに彩を添え、外地での駐在や現法経営といった特殊な経験と同様に、いやそれ以上に大切な宝物であると思っております。

テニス狂の皆様、五年後、一〇年後もまたどこかでテニスをして、大いに酔っ払って盛り上がりましょう。“解任された監督”のミックスタブルスを肴にして……。

読書ノート

『死の病原体・プリオン』

リチャード・ローズ著

草思社刊（一九九八年）

狂牛病の感染が話題になっている。これはたんに偶発的な出来事ではない。人類の食肉生活の基本にかかわる深い問題を孕んでいる。この感染病のメカニズムは未解明だが、かなりのことが分かっている。解明が進むにつれ、近い将来、感染範囲が拡大することが予想される。その時に慌てふためくことがないよう、この感染症にかかわる問題の本質をよく理解しておくことが必要だろう。その最初のステップとして、本書を薦めたい。

感染症の発見

多分、いま狂牛病と呼ばれている

「感染性スポンジ状脳症」と呼ばれる病気は、今に始まったものではない。そのような一般的な病名で症状と原因が確定されつつあるというのが、現状だ。

この病気の発見にも、ハンガリー人がかかわっている。ニューギニアの食人種族に蔓延していた感染病の研究でノーベル医学・生理学賞を受賞（一九七六年）したガイドウシエクは、第一次大戦前にアメリカに移住したスロバキア人の父と、デブレツェン出身のハンガリー人の母をもつアメリカ人として育った。幼年期には、スロバキアとハンガリーで夏を過ごし、スロバキア語もハンガリー語も解す。現在でも、頻繁にハンガリーを訪れている。ガイドウシエクの個人的な履歴は、本書の範囲ではないが、本書では彼をチェコ系のアメリカ人と紹介している。これは間違いである。

それはともかく、ガイドウシエク

が一九五〇年代のニューギニアのある地方で最初に観察した（一九五七年）のは、現地でクールー病と呼ばれていた奇病だった。とくに子供や女性がある日突然に、酔っ払いのようにふらつき出し、やがて死を迎えるという病気である。この原因不明の感染症で死亡した患者の脳細胞を検査することから、脳に観察される損傷がクロイツフェルト・ヤコブ病と類似していることが発見された。

つまり、この病気に共通してみられる特徴は、脳細胞のたんぱく質の変性である。それがクルー病では小脳を中心に広範に観察される。クロイツフェルト・ヤコブ病の場合には、脳にスポンジ状の病変が広範に観察される。これは脳細胞を形成するたんぱく質が変性したものである。変性し、脳細胞に孔があき、脳がスポンジのような状態になっている。「スポンジ状脳症」という呼称はここからきている。

クールー病の原因

この病気が蔓延しているクールー地区には、死者の肉体を食するという習慣が見られた。それは死者を吊うという意味と、たんぱく質の補給という意味があつたと考えられる。ただし、死者を食するという実際の行為は、女性が主体になっており、成人男性は参加していない。子供が加わって、死者を吊う儀式のプロセスとして、食人儀式が存在していた。そして、ほぼ例外なく、食人習慣をもつ子供や女性を中心に、クールー病の発症が観察された。

ここから、この感染症はたんぱく質を介するたんぱく質の変性をもたらす病気だと推定された。異常たんぱく質を摂取することから、正常なたんぱく質が変性する、その変性が脳細胞に集中して発生するのがクールー病であり、クロイツフェルト・ヤコブ病もまた、異常たんぱく質の摂取（異常たんぱく質に犯された硬膜

などへの利用）が、脳における正常細胞内のたんぱく質の変性を惹き起こすものと考えられるようになった。

病原体を「プリオン」と命名

同種の病気が、人間だけでなく、ひつじや牛にも観察できる病気だと分かり、この「スポンジ状脳症」を惹き起こす病原体やメカニズムに研究が移っていった。

カリフォルニア大学の神経科医のブルシナーが一九八二年の論文で、これらの新しいタイプの「たんぱく質性病原体」を「プリオン (Prion)」と呼ぶことを提唱した。この語そのものは、何も特別なことを意味するわけではなく、protein と infection の合成語に過ぎない。つまり、プリオンとは「タンパク質感染症」を意味するに過ぎない。

しかし、ここから多くの研究者は変性・異常化したたんぱく質をプリオンと呼ぶようになっていく。

プリオン化メカニズムは未解明

ブルシナーはプリオンの発見（命名）で、一九九七年にノーベル賞を受賞しているが、いかにして正常なたんぱく質がプリオン化するのか、そのメカニズムはいまだに解明されていない。新種のウイルスが介在しているという説もあるが、何らかの原因でたんぱく質の変性が伝染されるという説が有力である。

たんぱく質がプリオン化するということは、たんぱく質が死ぬということでもある。たんぱく質の独特のヘリックス（らせん）構造がなくなり、棒状に変化する。そのたんぱく質の死への変性が、どのようなメカニズムで生じていくのか、また現在の人類の食肉習慣から、将来、狂牛病症状が大量発生する可能性があるのか（変質たんぱく質の摂取から脳細胞の変性にはかなりの時間が必要）。それに明確に答えている研究者はいない。

（盛田 常夫）

ハンガリー出身・

関連科学者一覧

アルファベット姓名順

(英語名・ハンガリー語名)

バロー卿 (Lord Balogh - Balogh Tamás、1906-1981年)

ブダペスト生まれ。ミンタ高校を卒業の後、ブダペスト、ベルリン、ハーバードで経済学を学び、1938年にオックスフォード大学バリオールカレッジ教授。1970年に爵位を受ける。1974-1975年に英国エネルギー相に就任。

バーラーニイ、ロバート (Robert Bárány - Bárány Róbert、1876-1936年)

ウィーンに生まれ、スウェーデンで死去。ドイツ語とハンガリー語を話した。父はハンガリーのヴァールパ

ロータ出身で、1866年にウィーンへ移住し、1877年にオーストリア国籍を取得。ウィーン大学で医学を学んだ後、ウブサラ大学で耳鼻医学教授(1917年)。1912年に、国際耳鼻医学会議でピューリッツァー賞を受賞(ポストン、1912年)。1914年に「内耳器官における生理学への寄与」で、ノーベル生理学賞を受賞。

パウエル卿 (Lord Peter Thomas Bauer - Bauer Péter Tamás、1915年)

ブダペストで生まれ、ブダペストとセゲドで法学を学ぶ。1939年に英国に亡命。ケンブリッジとロンドンで経済学を学ぶ。農業経済を専攻し、ケンブリッジ大学教授(1960-1983年)。1983年に爵位を受ける。

バイ、ゾルタン (Zoltan Bay - Bay Zoltán、1900-1992年)。
ハンガリー東南部の町ジユラで生ま

れ、デブレツェンのカルビン教会高校で学ぶ。セゲド大学教授、ブダペスト工科大学教授を経て、1948年にハンガリーを離れる。ジョージワシントン大学、アメリカ大学教授。フランクリン研究所のボイデン賞(Boydén Prize)を受賞。ワシントンで死去し、故郷のジユラに埋葬された。

ベーケーシ、ジョージ (George von Békésy - Békésy György、1899-1972年)

ブダペストに生まれ、ベルン大学で化学工学を学ぶ。1923年にブダペスト大学で実験物理学を修得し、1939年に実験物理学教授に就任。1946年にハンガリーを離れ、ハーバード大学教授(1947年)、ハーバード大学教授(1966年)。「内耳における刺激メカニズムの生理学的解明への寄与」でノーベル生理学賞を受賞(1961年)。ハワイで死去。

ボット、ラオウル (Raoul Bott - Bott Raoul, 1923年 -)

ブダペスト生まれ。父ボット・ルドルフと母コヴァーチ・マルギットは、子供たちを連れて、スロバキア、英国、カナダへの移住の後、アメリカに定住。ラオウルはカーネギー大学を卒業の後、プリンストン大学とミシガン大学で勤務した後、ハーバード大学教授。現在、ハーバード大学名誉教授。専攻は、微分位相幾何学。1970年にヴェブレン賞、全米科学財団賞受賞。2000年にウォルフ賞受賞。 *American Journal of Mathematics* の位相数学部門編集委員、 *Annals of Mathematics* の編集委員。

エルデシュ、ポール (Paul Erdős - Erdős Pál, 1913-1998年)

ブダペストに生まれ、タヴァスメズーウツァイ高校に通い、父が教鞭をとっていたセント・イシュトヴァ

ーン高校に転校した。1930年にハンガリーを離れたが、終生ハンガリー国籍を保持。1950年代の大学の名誉博士号を取得。アメリカ数学会のコール賞受賞(1951年)。ウォルフ賞受賞(1984年)。ワルシャワで死去し、ブダペストに埋葬された。

エルンスター、ラルス (Lars Ernter-Ernter László, 1920-1988年)

ブダペスト生まれ。ハンガリーで結婚。1944年にストックホルムに亡命。1951年にスウェーデン国籍を取得。ストックホルム大学生化学研究所所長(1967-1986年)。ノーベル賞化学委員会委員、ノーベル財団理事。生きた細胞へエネルギーを供給するミトコンドリアの研究。

エトヴォシユ、ロラーンド (Loránd Eötvös-Eötvös Loránd, 1848-1919年)

エトヴォシユ協会の創設者(1891年)。ハンガリー科学アカデミー総裁(1889-1905年)。ブダペスト大学学長(1891-1892年)。教育大臣(1894年)。

フリードマン、ミルトン (Milton Friedman, 1902年 -)

ブルックリン生まれ。父母は現ウクライナ領のベレグサースで生まれた。父はフリードマン・イエヌー(1878年生まれ)、母はランダウ・シャール(1881年生まれ)で、それぞれアメリカへ移住(1894年、1895年)した後、ブルックリンで知り合い結婚する。父イエヌーは短期間、ブダペストで勉強した。父母の母語はハンガリー語で、ミルトン・フリードマンはハンガリー語を解する。16歳でルートガー大学に入学し、長らくシカゴ大学教授を勤めた(1946-1977年)。ノーベル経済

学賞受賞。1990年にハンガリーを訪問。**ガボール、デニス** (Dennis Gabor-Gábor Dénes、1900-1979年)

ブダペスト生まれ。ブダペスト工科大学で学び、ベルリン工科大学で博士号取得(1927年)。シーメンス社勤務(1927-1933年)、ブダペストのツングスラム社勤務(1933-1934年)を経て、英国のトムソン・ヒューズトン社(1934-1949年)に勤める。ロンドン大学インペリアル校で教鞭をとり、1958年に教授。1971年にノーベル物理学賞受賞。

ガイドウシエク、ダニエル・カールトン (Daniel Carleton Gajdusek、1923年-)

スロバキア人の父カール・ガイドウシエクは第一次世界大戦前にアメリカに移住し、そこでデブレツェン出身のハンガリー人を両親に持つド

プロツキー・オツティラートと結婚。カールトンは幼年時代、毎年夏、父の故郷であるスロバキアと母の故郷であるデブレツェンの祖父母の所で過ごしており、現在でもスロバキア語とハンガリー語を話す。ロチェスター大学、ハーバード大学、カリフォルニア工科大学で学び、USA国民衛生研究所に勤務する傍ら、熱帯病を研究。「伝染病の源泉および伝染メカニズムの発見への寄与」により、ノーベル生理学賞を受賞(1976年)。毎年、スロバキアとハンガリーを訪問し、大学で講演している。

ゴルドマーク、ピーター (Peter K. Goldmark-Goldmark Péter Károly、1906-1977年)

祖父の兄弟であたるゴルドマーク・カローイは、オペラ「サバの女王」の作曲家。ピーターの名に付されたカローイは、その縁者を現している。ブダペストとウィーンの高校

に通い、卒業後にベルリン工科大学で学んだ。ベルリンではガボールと一緒に勤務。1933年にニューヨークに渡り、CBSに勤務する。その後、CBS副社長となる。1940年にカラーテレビとLプレコードを発明。1977年にカーター大統領より、全米科学財団賞受賞。息子のピーター・ゴルドマークはロックフェラー財団理事長を務めた。

グロウヴ、アンドリュウ (Andrew Grove-Gróf András István、1938年-)

マダーチ高校卒業(1955年)後、ブダペスト工科大学に入学。1956年にアメリカへ亡命。インテル社の創業者の一人。インテル社社長、会長を歴任。ハンガリー人の妻エヴァとともに、カリフォルニア在住。亡命以後、ハンガリーを訪問したことはない。

グロスマン、マーセル (Marcel Grossmann-Grossmann Marcel、1878-1936年)

ブダペスト生まれ。母語はドイツ語。父がブダペストに工場を所有していた関係で、他の兄弟とともに、小学校から高校までハンガリー語の学校に通う。1893年に一家はスイスに移住し、そこで高校を卒業する。チューリッヒの連邦工科大学で、アインシュタインと一緒に学士号を取得(1900年)。アインシュタインはグロスマンと共に、一般相対性理論を完成。一般相対性理論の隔年の国際会議は、「マーセル・グロスマン会合」と命名されている。

ハルシャニー、ジョン (John C. Harsanyi-Harsanyi János、1920-2000年)

ルーテル教会高校卒業。全国数学コンクールで優勝、ギリシア語コンクールで3位入賞(1937年)。ブダ

ペスト大学で薬学学士を修得の後、哲学で博士号取得(1947年)。1950年にオーストラリアへ亡命。スタンフォード大学で数学の博士号取得。カリフォルニア大学バークレー校教授(1964年)。1994年にノーベル経済学賞受賞。頻繁にハンガリーを訪問している。

ヘヴェシ、ジョージ (George de Hevesy-Hevesy György、1885-1966年)

ブダペスト生まれ。ピアリスト・カトリック教会高校卒業。ブダペスト大学で化学を学び、ベルリン、フライブルグで勉学を続ける。1919年にブダペスト大学物理学教授。1920年にハンガリーを離れる。フライブルグ大学教授(1926年)、コペンハーゲン大学教授(1933年)。1943年に、ハンガリー国籍を保持してノーベル化学賞を受賞。その後、ストックホルム大学教授に就任し、1943

年にスウェーデン国籍を取得。

ロヴァス、ラスロ (László Lovász-Lovász László、1948年-)
フアゼカシユ高校に通う。全国数学コンクールで優勝。エトヴォシユ大学、イェール大学教授を経て、マイクロソフト主席研究員(1999年)。ハンガリー化学アカデミー会員。数学のランダム・ウォーク理論の分野で、ウォルフ賞受賞(1999年)。

ホッフ、ニコラス (Nicholas Hoff-Hoff Miklós、1906-1997年)
カルビン教会高校卒業後、チューリッヒ連邦工業大学の機械工学を卒業。ブダペストの航空会社 (Weiss Manfred Művek) に勤務。1939年にアメリカに亡命。スタンフォード大学で博士号取得。ブルックリン工科大学教授に就任の後、スタンフォード大学航空・宇宙学研究所所長(1957-1971年)。航空機および

宇宙飛行船の機械的な完成化に従事。
航空・宇宙関連の各賞受賞。

イジャーク、イムレ (Imre
Izsak-Izsak Imre' 1929-1965年)

ハンガリー南部の地方都市ザラエ
ゲル市出身。エトヴォシュ・コンク
ールで優勝し、ブダペスト大学に学
ぶ。1956年にチューリッヒに亡命、
そこからアメリカに渡り、1964年
にアメリカ国籍を取得。スミソニア
ン研究所勤務の後、NASA宇宙機械
部門長(1960年)として、人工衛
星の軌道計算に従事。パリの国際会
議参加中に心臓発作で死去。月面ク
レーターに名前を残す(1970年に
命名)。

カルドア卿 (Lord Nicholas
Kaldor-Káldor Miklós' 1908-1984
年)

ブダペストに生まれる。ミンタ高
校に入学し、17歳で卒業。ドイツで

経済学を学ぶ。ロンドン経済大学教
授を経て、ケンブリッジ大学キング
スカレッジ教授。ウィルソン首相の
租税政策顧問。

カルマン、テオドール (Theodore
von Kármán. Kármán Tódor '
1881-1963年)

ブダペスト生まれ。ミンタ高校に通
い、エトヴォシュ・コンクールに優
勝。ブダペスト工科大学で機械工学
の学士号取得。1919年にドイツへ
亡命。流体力学のパイオニアで、ジ
ェット飛行機の開発に大きな貢献。
アイゼンハワー大統領より「自由の
勲章」(1956年)、ケネディ大統
領より最初の「国民科学賞」(1959
年)を受賞。月面および火星のクレ
ーターに名を残している。

ケメニイ、ジョン (John G.
Kemény-Kemény János György '
1926-1992年)

ブダペスト生まれ。ベルジエニイ高
校卒業し、1940年にアメリカに亡
命。プリンストン大学で学士号、博
士号取得。1945年にアメリカ国籍
取得。1948年にプリンストン研究
所でインシユタイン助手。その後、
ダートマス大学教授、学長に就任。
BASIC言語の開発(1962年)、『
E-mailネットワークの開発(1964
年)』をおこなう。IBMの第一回ロビ
ンソン賞受賞(1991年)。

クライン、ジョージ (George
Klein-Klein György' 1925年-)

カルパチア地方(現スロバキア)に
生まれ、1930年に一家はブダペス
トに移住。ベルジエニイ高校に通う。
セゲド大学とブダペスト大学で医学
を学ぶ。ホロコーストを逃れ、エヴ
アを妻に娶り、ストツクホルムに亡
命(1947年)。カロリンスカ大学
で医学の学士を取得。同大学の教授
となり、癌研究部門長(1957-1993

年)に就任。癌の発因子の研究に従事。各種医学賞を受賞。ノーベル生理医学賞委員会委員。1970年以降、頻繁にハンガリーを訪問。

クライン、オスカー (Oscar Klein-Klein Oszkár、1894-1977年)

父ゴットフリート・クライン(1852-1914年)はホモンナ(現スロバキアのフメンネ)に生まれ、ハンガリーの学校に通った。ハイデルベルグとベルリンで学んだ後、ラビ(ユダヤ教師)となり、ストツクホルムへ移住した(1883年)。ウプサラ大学名誉教授(1897年)を経て、ストツクホルムで死去。息子オスカーはストツクホルム大学の理論物理学教授(1930-1962年)となり、コペンハーゲンのニールス・ボーアとともに、量子力学を研究。クライン・ゴルドン方程式、クライン・仁科公式、クラインのパラドッ

クスなど業績を残す。

ケストラー、アーサー (Arthur Koestler、1905-1983年)

「相対性理論が誕生したその年に生まれた」というのが、ケストラーの口癖だった。レアル高校に通い、1919年にハンガリーを離れ、ウィーン工科大学で学ぶ。その後、パレスチナ、パリ、ドイツ、ソ連を経由して、ハンガリーに戻り(1932-1934年)、再びパリに移住。1929年まではハンガリー語で、1940年まではドイツ語で、以後は英語で思考したと言うが、ハンガリー人とは常にハンガリー語で話していた。1940年までハンガリーのパスポートを保持。ドイツのフランス侵攻時に英国に渡り、そこで英国国籍を取得し、オックスフォードに定住した。

コンドロシ、アダム (Adam Kondorosi-Kondorosi Ádám、1946年)

セゲド生物中央研究所において、蝶植物によって、空気中の窒素を取り込むミクロ組織の共生を解明した。フランス国立中央研究所が植物研究所の創設に際して、コンドロシを招聘し、研究所長に任命(1987年)。カルロス・J・フィネイ(Carlos J. Finay)賞を受賞(1999年)。

コルダ、アレクサンダー (Sir Alexander Korda-Korda Sándor、1983-1956年)

メズートウールの小学校に通い、その後ブダペストの商業高校を卒業。1919年に政治的理由でドイツに亡命し、そこからハリウッドに移住。映画監督、プロデュサーとして、ロンドンに定住。「ヘンリー八世の私生活」や「ハミルトン夫人」が代表作。

クルティ、ニコラス (Nicholas Kurti-Kürti Miklós、1908-1999年)

父はペシュト商業銀行の副頭取で、1898年にハンガリー風のキュルティに改名。ニコラスはミンタ高校に通い、パリとベルリンで学んだ後に、最終的に1929年にハンガリーを離れ、英国に定住。1939年までハンガリー国籍を保持。オックスフォード大学教授(1967-1975年)。国際物理学連合(IUPAP)の第一回「フリッツ・ロンドン賞」を受賞(1958年)。ブダペストのファルカシウ国立墓地に埋葬。

ランツォシユ、コルネリウス (Cornelius Lanczos-Lánczos Kornél、1893-1974年)

セーケシユフェヒールヴァールに生まれ、地元のカトリック教会高校に通う。ブダペスト大学を卒業後に、ブダペスト工科大学助手となり、オ

ルトヴァイの指導の下にセゲド大学で博士号を取得(1921年)。翌年にドイツに亡命し、アインシュタインの助手となる(1928-1929年)。1931年にアメリカに渡り、ハーバード大学で教鞭をとり、1938年にアメリカ国籍を取得。1954年にアイルランドに移住し、ダブリンの高等研究所に務める。ブダペスト滞在中に心臓発作で死去。

ラックス、ピーター (Peter Lax-Lax Péter、1926年・)

ミンタ高校に通う。スライードの同級生のコロデイは叔父にあたる。ノイマンの推薦状を手に、1941年にアメリカに渡り、1944年にアメリカ国籍を取得。エルデシユがラックスをプリンストンに呼び寄せた。兵役中、ロスアラモスのコンピュータ技術課で働く(1945-1946年)。微分方程式の解法の理論と技術に従事。ニューヨーク大学クーラント数

学研究所長を務める。全米科学財団賞(1986年)、ウォルフ賞(1987年)を受賞。頻繁にハンガリーを訪問。

レナード、フィリップ (Philipp Eduard Anton Lenard-Lenard Fülöp、1862-1947年)

オーストリア人の家族の一員として、ハンガリーで生まれる。母語はドイツ語だが、ポジヨニイ(ブラチスラバ)のハンガリー王立レアル高校に通った。卒業後、ブダペスト大学、ハイデルベルグ大学、ベルリン大学で学ぶ。1886年にハイデルベルグ大学で博士号を取得した後、ブダペスト大学助手になる(1886-1887年)。その後、ハイデルベルグ大学、ボン大学を経て、ハイデルベルグ大学で教授に就任(1896-1931年)。1897年にハンガリー国籍を保持したまま、ハンガリー科学アカデミー正会員に選出。

その後、ドイツ国籍を取得。1905年にノーベル物理学賞を受賞。

ロヴァス、ラスロー (Laszlo Lovasz-Lovasz László, 1948年-)
ファゼカシユ高校卒業。全国数学コンクールで優勝。エトヴォシユ大学およびイエール大学教授を経て、1999年からマイクロソフト社首席研究員。数学のランダム・ウォーク論の分野でウォルフ賞受賞(1999年)。

メゼイ、フェレンツ (Ferenc Mezei-Mezei Ferenc, 1942年-)
ラーコーツィー高校、アパーツアイ・チエレ高校に通い、全国数学コンクールで優勝。国際学生物理オリンピックで金賞。エトヴォシユ大学で物理学を修得。ヨーロッパ物理学会ヒュレット・パッカー賞受賞(1984年)、ハンガリー科学アカデミー第一回ウイグナー賞受賞

(1999年)。現在、ハンガリー国籍を保持したまま、ロシアラモスで研究。

ノイマン、ジョン (John von Neumann, Neumann János, 1903-1957年)

ルーテル教会高校に通う。1926年にハンガリーを離れ、チューリッヒで化学工学を学ぶ(1923-1926年)。1926年にブダペスト大学で数学の博士号を取得し、ゲッティンゲンでヒルベルトの助手となる。その後、1930年にアメリカに渡り、プリンストン大学教授。1937年にアメリカ国籍を取得。アメリカ数学会会長(1951-1953年)、アメリカ原子力エネルギー委員会委員(1954-1957年)、フェルミ賞(1956年)、USA自由の勲章受賞(1956年)。プリンストンに埋葬。
ノイマン、マリナ (Marina von Neumann Whitman-Neumann

Marina, 1935年-)
ノイマンとクヴェシ・マリエッタとの間に生まれた。1956年にラトクリフ・カレッジを卒業し、1962年にコロンビア大学でPh.D.を取得。GMの主席エコノミストを経て、ニクソン大統領の経済顧問(1970-1973年)。

オバート、ヘルマン (Hermann Oberth-Oberth Hermann, 1894-1989年)

エルデューイ(現ルーマニア領のハンガリー人居住地)のドイツ殖民出身で、ドイツ語を母語とする。父は外科医で、ハンガリーの学校へ通った後、ミュンヘンで医学を修める。幼少より宇宙に関心があり、ミュンヘン、ゲッティンゲン、ハイデルベルグで物理学を学び、コロージュヴァーリ大学(クルージュナポカ)で数学・物理学教師の学士を取得(1925年)。エルデューイで教職

に就く。ロケットの液体・固体燃料、ならびに多段階ロケットを研究。

1930年代にはペーネミュンドでブラウン (Werner von Braun) と共同研究に携わり、1950年代には彼と共にアメリカでロケット開発に従事。ドイツ発明教会ジーゼル賞 (1954年)、エドワード・ペンレイ賞 (1956年)、ガガーリン・メダル (1961年)、フランス共和国勲章 (1962年)、ウーイン大学ジヨゼフ・リヒター・メダル (1963年) などを受賞。

オラー、ジョージ (George Andrew Olah-Olah György、1927年-)
ピアリスト・カトリック教会高校を卒業し、ブダペスト工科大学で化学学士を修得し、1949年に博士号を取得。ブダペスト工科大学助手となる。1956年にハンガリーを離れ、英国、カナダを経由して、アメリカに渡った。ケース・ウエスタン大学

教授から南カリフォルニア大学教授。1970年にアメリカ国籍を取得。カルボカチオンの研究で、1994年にノーベル化学賞を受賞。ハンガリーを頻繁に訪問している。

オロワン、エゴン (Egon Orowan -Orován Egon、1902-1989年)
ブダペストの商業高校を卒業し、ウーイン大学に入学 (1920年) し、そこで博士号を取得 (1932年)。ベルリン工科大学の助手を経て、ブダペストに戻り、ツングスラム社に勤務 (1932年)。イムレ・ブローディとクリプトン電球を開発し、マイケル・ポラーニイと結晶転移を研究する。その後、英国に渡り、バーミンガム大学からケンブリッジ大学 (1937-1950年) へ。1950年にケンブリッジ大学からマサチューセッツ工科大学へ移る。トーマス・ハックスリー金メダル (1944年)、ガウス・メダル (1968年、ドイツ)。

マサチューセッツ・ケンブリッジに埋葬。

ポラーニイ、ジョン (John Polanyi -Polányi János、1929年-)
父はマイケル・ポラーニイ、母はケミーニイ・マグダ。ベルリンで生まれる。マンチエスター大学で学び、1962年からオントリオ大学教授。ウォルフ賞受賞 (1982年)。「化学反応のダイナミックスにかんする新しい領域の開拓への寄与」により、ノーベル化学賞受賞 (1986年)。

ポラーニイ、マイケル (Michael Polanyi-Polányi Mihály、1891-1976年)
ミンタ高校を卒業の後、ブダペスト医科大学に通う。ブダペスト大学の実験物理学科で、ヘヴェシの助手となる。1919年にドイツへ亡命。カーlsruール工科大学で博士号を取得 (1933年)。ベルリンのカイザー・

ヴイルヘルム物理化学研究所の終身会員（1933年）。ウイグナーの博士論文指導教官。1933年に英国に渡り、マンチェスター大学で物理化学教授（1933年）、後に哲学教授（1968年）。

シモニー、チャールズ（Charles Simonyi-Iffy. Simonyi Károly、1948年-）

父は第二次大戦後、国立物理学研究所の創設に加わり、原子力部門長となったシモニー・カーロイ（現ブダペスト工科大学名誉教授）。ラーコーツイ高校を卒業の後、ハンガリーを離れ、スタンフォード大学で博士号取得。シリコンバレーでゼロックス社に勤務するが、1981年にマイクロソフト社に移り、EXCELとWORDの開発設計に従事。現在、マイクロソフト社主席システムアーキテクトチャー。

シヨルテイ、ジョージ（Sir George Solti-Solti György、1912-1997年）

ブダペストに生まれる。バルトークとコダーイに師事。オペラハウスの指揮者になるが、1939年にハンガリーを離れる。戦後、ミュンヘンのオペラハウス（1947年）、フランクフルトのオペラハウス（1952年）、コヴェント・ガーデン（1961-1971年）の指揮者を歴任。英国で爵位を授与される（1972年）。1996年にウォルフ賞。遺言に従いファルカシユレートのバルトーク墓の隣に埋葬。

シヨモルヤイ、ガボール（Gabor Somorjai-Somorjai Gábor、1935年-）

ブダペスト工科大学で化学の学士を取得（1956年）。1956年に亡命。アメリカ国籍を取得（1962年）。1972年より、カリフォルニア大学物理化学教授。ウォルフ賞受賞（1998年）。

ソロス、ジョージ（George Soros -Soros György、1930年-）

ベルジェニイ高校に学ぶ。1947年に英国に渡る。ロンドン経済大学を卒業（1952年）。その後、アメリカに渡り（1956年）、アメリカ国籍を取得（1961年）。クウォンタム・ファンドを創設。開放社会財団、ソロス財団の設立。

セベヘイ、ヴィクター（Victor Szebehely - Szebehely Győző、1921-1997年）

ブダペストのカトリック教会高校を卒業の後、ブダペスト工科大学に学び、博士号を取得。1947年にアメリカに亡命。ニューヨーク大学、ヴァージニア州立大学、メリーランド大学、ジョージワシントン大学、イェール大学、テキサス大学で教鞭をとり、GE社に勤務。アメリカ国籍を取得（1954年）。アポロ宇宙船

の飛行軌道を設計した。オランダ女王より爵位を授与（1957年）。アメリカ宇宙学会の第一回ブラウアー（Brauwer）賞受賞。ハンガリー出身の多く研究者と共同作業を行った。オースティンに埋葬。

セント・ジョルジイ、アルバート

（Albert Szent-Györgyi - Szent-Györgyi Albert / 1983-1986年）

カルビン教会高校に学び、ブダペスト医科大学を卒業。セゲド大学教授（1931年）、ノーベル生理医学賞受賞（1937年）。スウェーデン国籍（1944-1954年）を取得、1948年にハンガリーを離れ、アメリカに渡る。1954年にアメリカ国籍を取得。ウッドホールに埋葬。

スイラード、レオ

（Leo Szilard-Szilárd Leó / 1898-1964年）

リアル高校在学中にエトヴォシユ・

コンクールに優勝。ブダペスト工科大学に入学。1916年にハンガリーを離れ、ベルリンのマックス・フオン・ラウエの指導で、博士号を取得。1943年までハンガリー国籍を保持、以後アメリカ国籍。原子力平和賞を受賞（1959年）。

テレグデイ、ヴァレンタイン

（Valentine Telegdi-Telegdi Bálint / 1922年-）

1923年にハンガリーを離れたが、小学5・6年次をブダペストで過ごす。ローザンヌ工科大学の化学で学士号取得。シカゴ大学とスイス連邦工業大学で物理学教授。フェルミラボ、CERNに勤務。シカゴ大学フェルミ講座教授。ウォルフ賞受賞（1991年）。ジュエーヴ在住。頻繁にハンガリーを訪問。

テラー、エドワード

（Edward Teller-Teller Ede / 1908年-）

ミンタ高校時代にエトヴォシユ・コンクールに優勝。ブダペスト工科大学化学工学に入学。1928年にハンガリーを離れ、カールスルーエ大学で学士号を、ハイゼンベルグ大学で博士号を取得。1942年にアメリカ国籍。ケネディ大統領よりフェルミ賞受賞（1962年）。レーガン大統領より全米科学財団賞を受賞（1986年）。スタンフォードに在住。

ティサ、ラスロー

（László Tisza-Tisza László / 1907年-）

ブダペストのヴェルブーツィー高校とマーチャシユ高校に通う。エトヴォシユ・コンクールで優勝。ブダペスト大学に学び、1932年に博士号取得。1930年にハンガリーを離れ、ソ連でランダウとともに、チャルコフ大学に勤務（1935-1937年）。その後、Collège de Franceに移り（1937-1940年）、1941年にアメリカに渡る。現在、マサチューセ

ツツ工科大学名誉教授。90歳の誕生日は、MILOで祝われた。定期的にハンガリーを訪問。

ヴィーセル、エリー (Elie Wiesel -Wiesel Eliezer、1928年・)

現ルーマニア領のマラーモシユスイゲットに生まれる。母語はイディッシュ語。ハンガリー東部のデブレツェン市の高校を卒業した。マラーモシユスイゲットからブツヒエンヴアルドの収容所に連行され(1944年)、そこで家族を失ったが、彼は生き残った。「ホロコースト」はヴィーセルが使用した言葉。パリとアメリカの大学で学び、1963年のアメリカ国籍を取得。現在、ボストン大学教授。1986年にノーベル平和賞を受賞。

ウイグナー、ユージン (Eugen P. Wigner - Wigner Jenő Pál、1902-1995年)

ルーテル教会高校を卒業した後、ブダペスト工科大学化学工学に入学したが、ベルリンで勉学を続けた(1921年)。マイケル・ポラーニの指導で博士号を取得し、技術者としてウーイペシュトで勤務した(1925-1926年)が、ドイツに戻り、そこからアメリカに渡った(1930年)。プリンストン大学教授に就任し、1937年にアメリカ国籍を取得。1973年より、定期的にハンガリーを訪問。フェルミ賞(1958年)、原子力平和賞(1960年)、フランクリン・メダル、マックス・プランク・メダル(1961年)を受賞。1963年にノーベル物理学賞を受賞。プリンストンに埋葬。

ジグモンディ、リチャード (Richard Zsigmondy-Zsigmondy Richárd、1865-1925年)

ハンガリーにおけるジグモンディ家の系譜は1630年まで遡ることがで

きる。リチャードの父ジグモンディ・アドルフはブダペスト生まれ、母サクマリー・イロナはマルトングアーシャルの生まれ。息子リチャードは、二人がウイーンに移住した後に生まれた。リチャードはウイーンに学び、エルランゲン大学で有機化学の博士号を取得。ズイーデントプフトとともに、限外顕微鏡を製作(1903年)。ゲッティンゲン大学教授(1907-1929年)。「コロイド化学の近代的基础を築いた寄与」で、1925年にノーベル化学賞を受賞。ジグモンディ家の子孫は現在もハンガリーで存命中。

編集室より

次号の締め切りは、三月中旬とさせていただきます。

TEL/FAX: 356-5721

e-mail: y-sakai@mail.matav.hu

電話・FAXが変わりましたので、ご注意ください。

【日本人会便り】

明けましておめでとございます。
会員の皆様のご多幸を事務局一
同心よりお祈り申し上げます。

昨年度は当地に在留する邦人数の増加による為でしょうか、各行事共に多数の参加者により賑やかな一時を過ごす事ができました。ご参加下さった皆様を始め各理事、お世話役の方々に改めて御礼申し上げます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

昨年十二月九日に行なわれた「二〇〇一年度年末総会及びディナーパーティー」は総勢二二七名参加の元開催されました。前半の総会にては活動報告や十一月末日現在の会計報告、新入会員の紹介そして二〇〇二年度の新役員が選出されました。総会後に承認された商工部会幹事・副幹事、及び補習校担当理事を含め、新理事は左記の通りです。
(敬称略)

理事長(会長)

吉岡 直道

(三井物産ブダベスト事務所長)

副理事長(商工部会幹事)

菱木 勤治

(ジェットロブダベスト事務所長)

副理事長(商工部会副幹事)

石崎 茂則 (協和発酵事務所長ノ
アグロファーム支配人)

総合理事

伊佐敷 眞一

(在ハンガリー日本国大使館公使)

日本人補習校担当理事

横山 佳弘

(ユーロエクセディクラッチ社長)

レジャー理事

野沢 正之 (ホンダハンガリー社
長)

運動担当理事

田路 亮三 (伊藤忠ハンガリー会社
社長)

ドノウ通信理事

盛田 常夫 (立山研究所社長)

後半のディナーパーティーではハンガリーのマジシャンとして第一人者で、日本公演も行っている DNGAR Aniko 女史によるマジックショー。そして各方面のご協力で景品総数二四〇本以上となった福引大会には二一世紀初の運試しに、皆、気合が入っていました。ただ、福引大会そのものの時間が長すぎた等の反省点多々あります。福引券の価格を上げ一人の購入枚数を制限すれば空籤が少なくなるが、運試しをしたい人は高額な福引券に反対で、今後の対応を考えていきたいと思っております。何はともあれ盛況の内に閉会となりましたが、福引大会の司会者・日製産業の佐分利氏、手伝ってくれた補習校高等部の皆さんや吉原先生、食事もそこそこに一時四〇分立ちっぱなし！本当にお疲れ様でした。

本年の活動計画は別途お知らせします。今年もレジャー・スポーツ行事で多くの会員の皆様とお目にかかるのを楽しみにしております。(事務局 酒井)